

第49図 鬼瓦実測図 文字瓦線刻・印判拓影

幅8.1cm、厚さ1.3cmの角を落とした杉板である。墨書の全文は以下の通りである。

(表) 文化元年 神主柿野岩見正藤源明清

奉建立仕加茂大明神則畑大明神□□

甲子三月 あつかり 同所松田治右衛門

(裏) 大工畑村 喜兵衛 願主同村 氏子中

(西村)

瓦 (第49図、図版48、第1表)

木造社殿の屋根に葺かれていた瓦は、総数 313 枚を数える。鬼瓦、棧瓦、軒棧瓦、丸瓦、軒丸瓦、平瓦、雁振瓦、熨斗瓦、その他の道具瓦等の種類がある。瓦の大半は無銘であるが、一部に文字瓦が混在している。文字瓦は文字をへら書きしたものと、印判を押捺したものとの2種類がある。そのうちへら書きを施したものは鬼瓦のみで、他はすべて印判の押捺である。印判はいずれも瓦の軒下方向にあたる面や、筒部の外面に押捺される。印判は以下の5種類が確認されている。

泉州 泉南郡西鳥取村大字波有手 岡田駒太郎

泉州 草竹鶴太郎

登録商標 泉州泉南郡下箱作 中谷新治郎製

泉州瓦工業□□□ 久堀正夫

泉州 泉南郡下荘村貝掛 久堀製

鬼瓦は棟の両端に設置されていたもので、合計2枚である。いずれも同形同大で、高さ

	無銘瓦	文字瓦	小計	備考
鬼瓦	0	2	2	瓦屋惣兵衛
棧瓦	122	19	141	草竹鶴太郎11 久堀製8
軒棧瓦	5	18	23	草竹鶴太郎8 久堀製10
丸瓦	8	1	9	中谷新治郎
軒丸瓦	1	0	1	
平瓦	44	0	44	
雁振瓦	0	12	12	岡田駒太郎
熨斗瓦	67	0	67	
道具瓦	11	3	11	久堀製2 久堀正夫1
合計	258	55	313	

第1表 木造社殿覆屋屋根瓦構成表

23.0cm、幅40.5cm、厚さ6.4cmである。前面中央に宝珠形の装飾があり、それより側方、および斜め下方に鱗が伸びる。背面上部には把持のための取手を設けている。向かって左側の上部鱗外面に、二行にわたり「新村瓦屋 惣兵衛」のへら書きを施している。

## B. 飯ノ峯神社下層遺構

本調査区は、土取り工事に伴って移転した神社跡地約100㎡である。

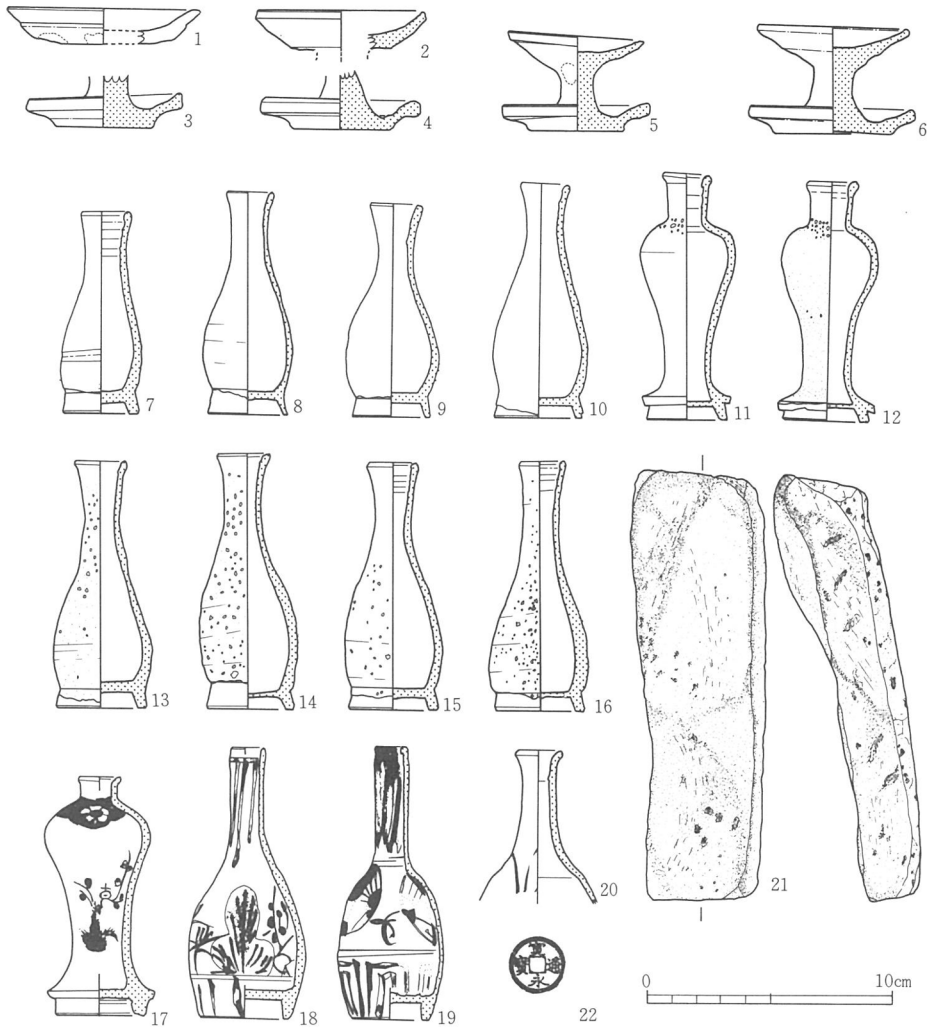
調査は社の基壇について建て替え及び下層遺構の有無についての確認を目的として実施した。木造社殿、石燈籠、祠の移転後、周辺地域を伐開、伐木し精査清掃を行った。

現況において基壇は露出しており二次堆積は見られなかった（第50図）。下層遺構についても、現存する基壇を構築する際、斜面を造成した跡が窺われるのみで時期をさかのぼる遺構・遺物は検出されなかった。享保13年（1728）銘の石燈籠の対に当たる位置にわずかばかりの凹地があり、本来燈籠は一对であった可能性は高い。調査区内からは祭祀に用いられたと思われる近世陶磁器が出土した。社、祠周辺、木の根元から灯明皿、神酒瓶、花瓶、寛永通宝等出土しいずれも19世紀後半のものである（第51図）。

現在同神社で確認できる棟札から推定できる建て替え、修理等の検証は不可能であった。



第50図 飯ノ峯神社下層遺構平・断面図



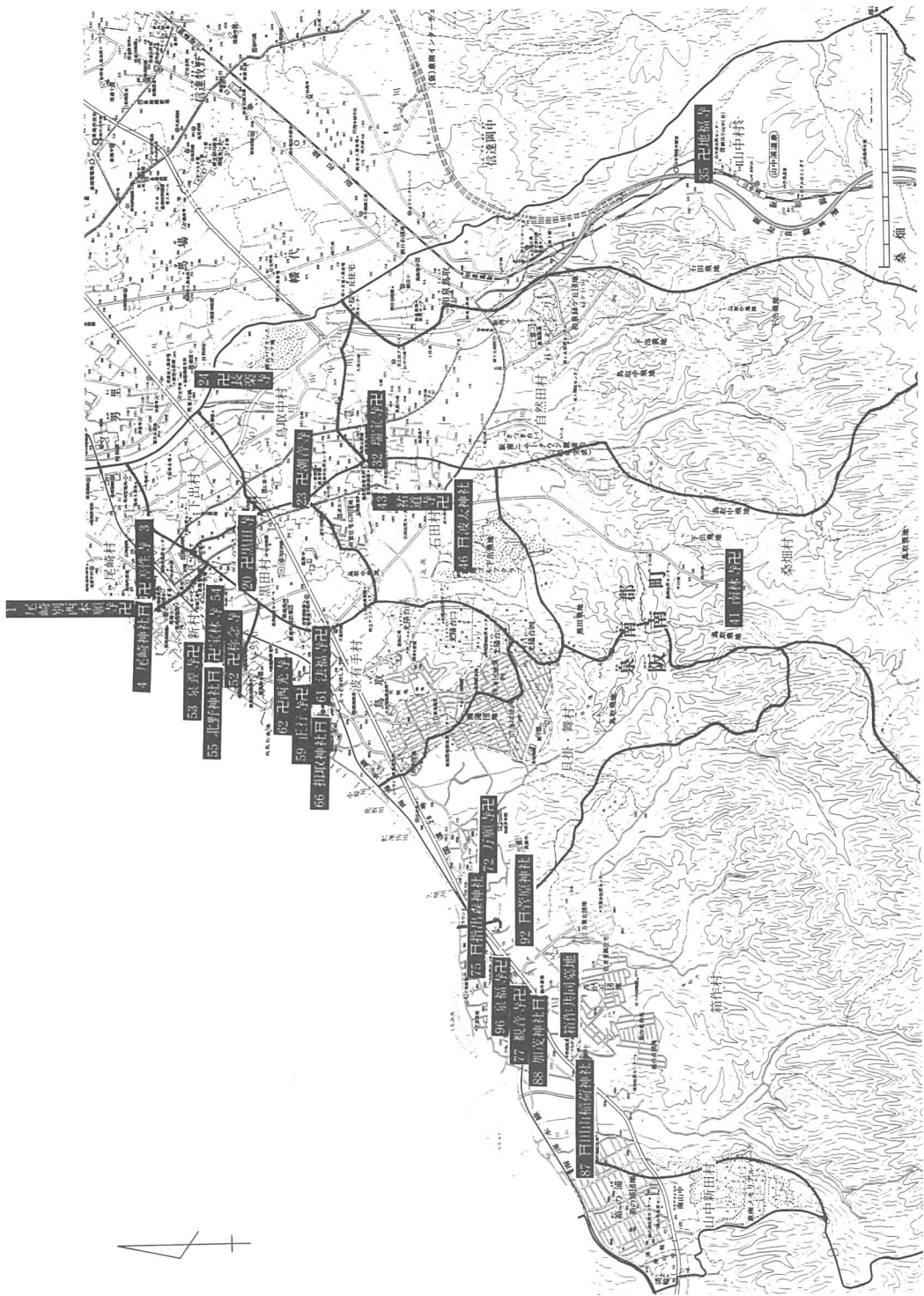
第51図 飯ノ峯神社下層遺構出土遺物

従って飯ノ峯畑村が大被害を受けた嘉永四年（1851年）の洪水時に現位置を保っていたか、或いは別地点から移転してきたものか不明な点が残る。

なお、本社は62年8月神事を取り行い、麓の菅原神社に移転後も、現在でも宮座経営が連綿と続いている。

現在同神社で確認できる棟札は、先の報告もあわせて4枚である。

1. 享保17（1732）年、奉□□畑大明神社
2. 宝暦8（1758）年、奉□□□畑大明神



第52図 阪南町内社寺分布図



3. 文化元年（1804）、奉建立仕加茂大明神則畑大明神□□

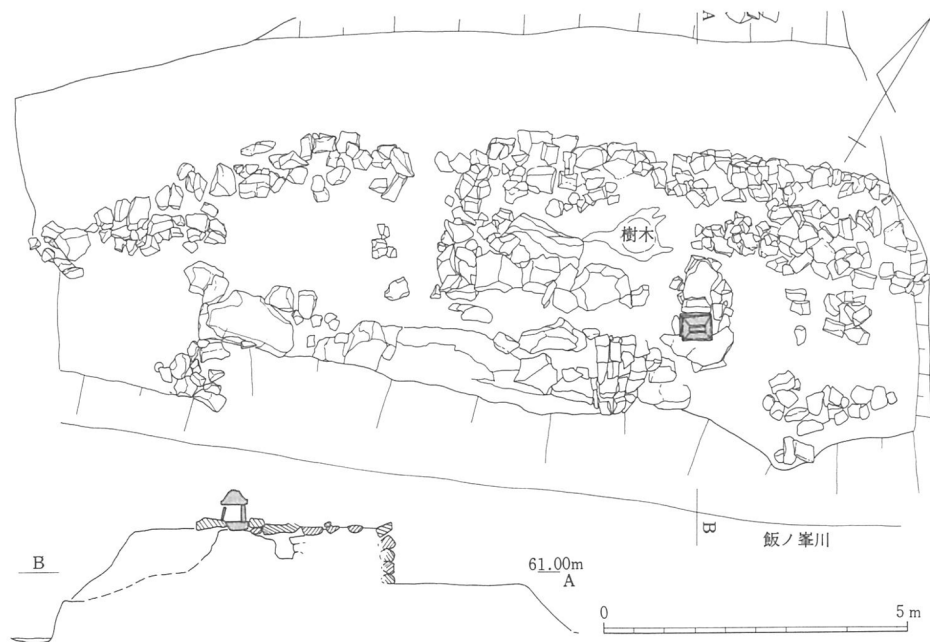
4. 慶応3（1864）年、奉破損修葺加茂大明神則畑大明神□□

社殿の創建時期は棟札からは不明であり、飯ノ峯畑村が大被害を受けた嘉永4（1851）年の洪水時に現位置を保っていたか、或いは別地点から移転してきたか不明である。しかし、現位置に保っていると仮定しても、レベル的に飯ノ峯川との比高は7mもあり上手の集落に比べ被害が少なかったかと考えられる。

出土した近世陶磁器は、江戸時代後半のもので棟札に合致する年代と考えてもよいと思われる。しかし屋根瓦は、慶応3年の棟札に相当する修理、及び近年修理したものも含まれる。近世瓦窯も町内の代表的な生業である為、今後、飯ノ峯畑の集落内との比較も検討したい。  
(服部)

#### C. 石祠（石祠4）

石祠4は、当協会の『阪南丘陵埋蔵文化財試掘調査報告書』において稲丸遺跡周辺の石祠として報告したものである。しかし今回、土取り工事で移転を余儀なくされたため、移転に伴う発掘調査を実施することになった。

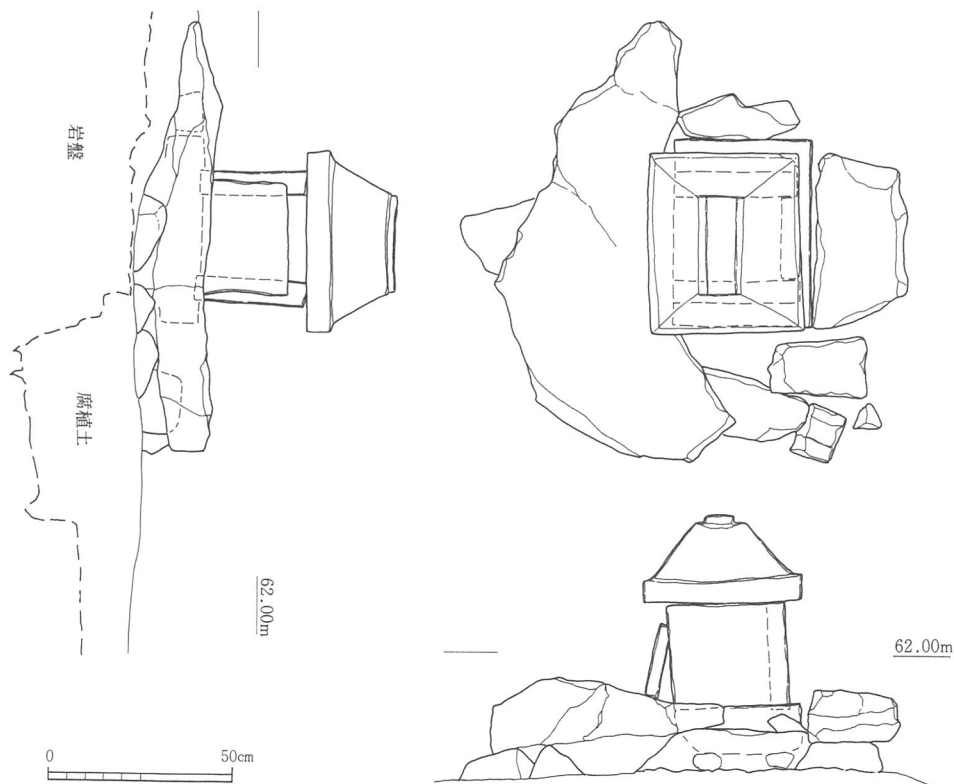


第53図 石祠4基壇実測図

石祠は稲丸遺跡の所在する丘陵の南端（車谷池西方の丘陵）から西へのびる尾根裾、飯ノ峯川右岸の、標高61.30mに位置する（G17SD）。周辺の地目は荒地であるが、荒地となったのは近年のことであり、かつて付近の谷間は田畑として利用されていた。

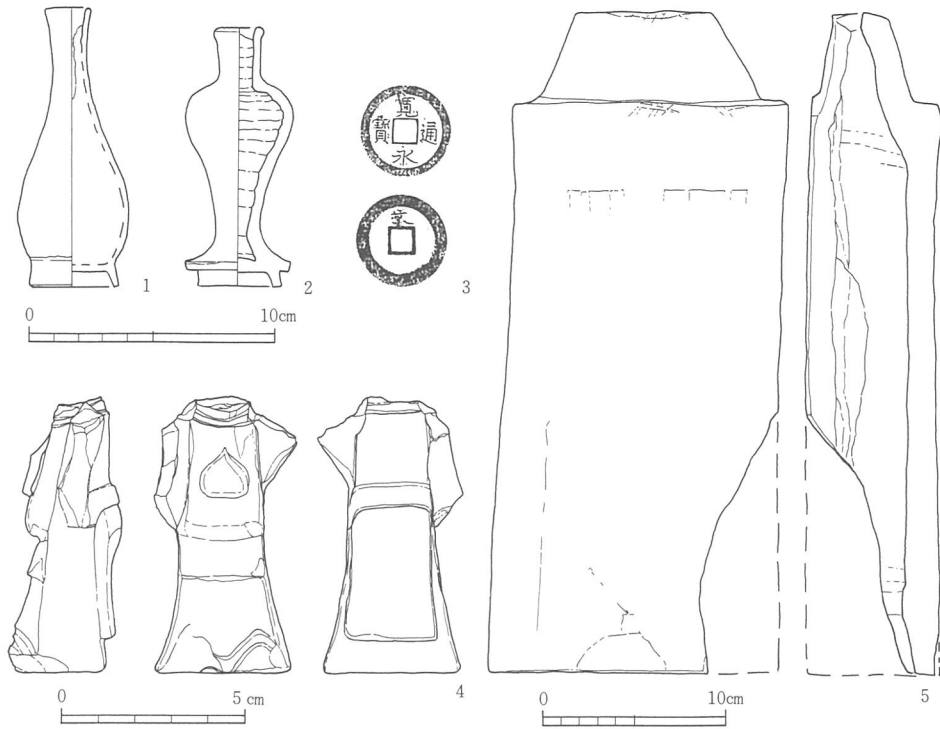
石祠は単独で飯ノ峯川右岸の堤の上に所在していた。石祠前面は飯ノ峯川に向き、南面する。北側には田畑の取水口が所在する。調査時の石祠は、屋根内面のくりこみと側板上端部がはずれた状態であった。石祠は和泉砂岩製で屋根1、側板3、扉石1、底石1の合計6枚の石材からなる。各石材の加工は、丁寧であった。構造は、三枚の側板が屋根内面と底石上面のくりこみにはめ込む仕組みになっていた。屋根は入母屋造を模していた。石祠の大きさは全高64cm。各石材の大きさは、屋根の短辺42cm、長辺52cm、高さ23.5cm。東西の側板が縦28.5cm、横31cm、厚さ6cm。北の側板が縦28.5cm、横24.5cm、厚さ6cm。底石は短辺35cm、長辺51cm、高さ13cmであった。石祠の前面には、底石とほぼ同じ高さに水平に板状の石（75×121cm、厚さ20cm）が置かれていた。

石祠周辺を発掘調査した結果、飯ノ峯川に向かって、L字状に石垣が積まれ、基壇が造られていたことが明らかになった。基壇の規模は幅2.1m、長さ11.5m、高さ0.9mであった。



第54図 石祠4実測図





第55図 石祠4出土遺物

基壇の南半部分は岩盤で、北半部に積土、積石がみられた。石祠はこの基壇のほぼ中心線上、基壇東端部から約2.3mの位置にあった。

石祠移転後の調査では、石祠直下に腐植土が約10cm堆積し、その下は岩盤であった。腐植土中からは、寛永通宝1、陶磁器花瓶7、土製神像1、丸瓦1が出土した。

寛永通宝（第55図3）は銅銭で背面に「文」の字がある。（初鑄寛文年間）表の文字は鮮明でほとんど磨滅しておらず、新銭の奉賽銭と推定される。外径2.52cm、内径1.995cm、重量3.09g。花瓶は、完形品1（第55図1）、体部を部分的に欠失するもの1（同図2）、体部下半部を欠失するもの1、口縁部の破片2、底部の破片1であった。(1)の釉は暗緑灰色、器高11.2cm、口径1.8cm、体部最大幅3.64cm、高台径3.64cm。土製神像（同図4）は頭部と両腕を欠く。色調は橙色で、残高7.5cm、裾幅3.8cm、重量6.0g。丸瓦は筒部隅を欠く。長さ35.9cm、幅15.6cm、高さ7.3cm。

石祠周辺のトレンチ調査で、飯ノ峯川に近い25・27・28トレンチの耕土、床土下の砂礫層から近世陶磁器片が出土した。そのため、飯ノ峯川は、近世のある年代に現在の河道とは異なった河道を流れたことを推測できた。このことから、飯ノ峯川右岸の堤と石祠の基

壇とが築かれた年代が近世以降と考えられた。このことは、石祠直下から寛文年間初鑄の寛永通宝が出土し、石祠の造営年代が江戸時代にまでさかのぼるのではないかと推測されることとも矛盾しない。

石祠直下から出土した遺物は埋置されたものである。出土遺物のうち土製神像、寛永通宝、陶磁器花瓶は石祠に関係した遺物と考えられる。ほぼ完形の丸瓦については、石祠付近の25・26トレンチから出土した瓦とともに、石祠に覆屋があったのか、石祠と並んで他の瓦葺建物が存在した可能性が考えられる。しかし、瓦の出土量が少なかったことから、瓦葺建物が放置された状態で崩壊したとは考えられない。

この石祠は取水口に近接した場所に、単独で所在していたもので、他の石祠が神社の境内に所在していたのとは、立地を異にする。石祠の祭神は村人に忘れられていたが、立地から石祠と水との関わりを推測することもできる。(佐々木)

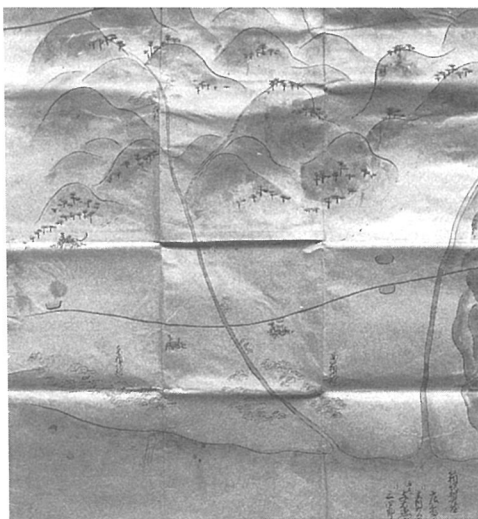
#### 第4節 飯ノ峯畑遺跡

飯ノ峯畑遺跡は、井山城D地区調査中に、すでに工事着工されたA～C地区の土掘り工事に伴う水路改修工事によって新たに発見された遺跡である。

付近は従来から「畑八軒寺一軒」の伝承が残る地域である。周辺小字名はかつて集落があったことを窺わせる“<sup>かいと</sup>垣外”である(第11図)。阪南町箱作村は、東村、西村、畑村の三つから構成されており、東村の管轄下にある枝村である畑村が、飯ノ峯畑村の別名である(第56図)。

『山中家文書』によれば一箱作村方畑村、嘉永四(1851)亥年七月十三日夜稀成大洪水=付家屋土地邑替嘆願取斗方諸口一の記述があり、屋敷、寺が著しい被害にあったため、現在箱作村のある小字名「堂ノ辻」「地藏堂」に移転したことが書かれており、現在の集落の位置と一致する。

飯ノ峯畑遺跡で検出された集落跡は戸数十軒で構成される現存の飯ノ峯畑村の前身に該当するものと考えられる。



第56図 箱作村絵図

飯ノ峯畑村は古文書によれば1600年頃、すでに戸数は現在とほぼ変わらず八〜九戸、三つの寺（地藏寺、施福寺、発得寺）、村社、菅原神社の他、無格社として三つの社（戎神社、池嶋神社、飯ノ峯神社）又、墓地二ヶ所のまとまりをもった小村として記録され、近世の様相を呈していた（第2表）。

今回、紙面の都合上概要を報告する。細は後日、改めて報告する。

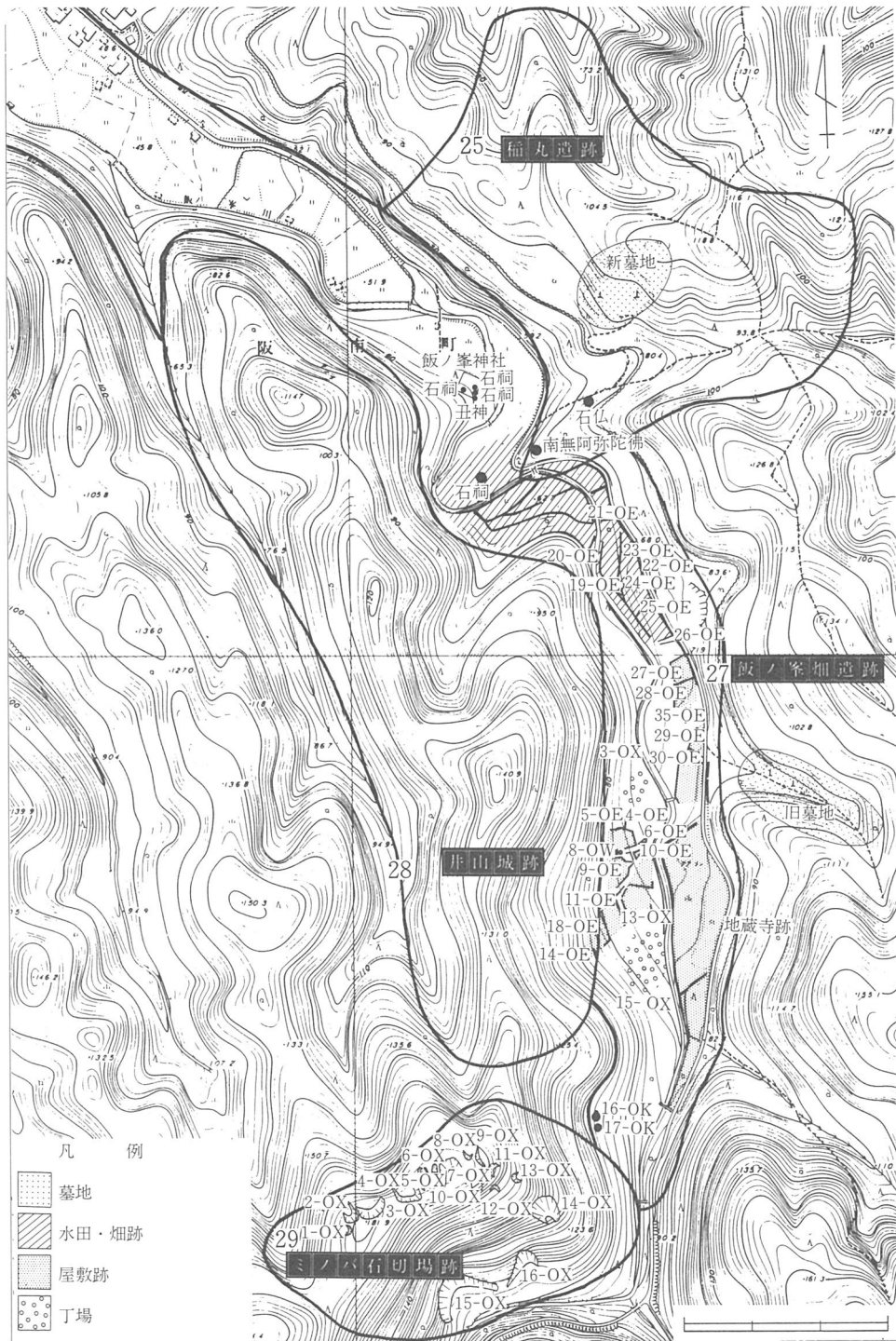
調査は集落の広がりが見込まれる平野部約20,000㎡の測量を実施した（第57図）。飯ノ峯畑村は飯ノ峯川兩岸に江戸時代の集落が良好な状態で遺存することが確認された為、協議の結果、発掘調査は水路による河川改修で直接破壊される飯ノ峯川右岸に限って行うことになった。

兩岸共に、石垣で区画された屋敷跡が数軒みられるが、性格は若干異っている。

左岸にみられる様相は、山の斜面を削り平坦面を3〜4段作りだしている。道は試掘調査したスガマ地区よりミノバ石切り場、井山城へと続いており、二又に別れるところでは道標状の石がみられる。

区画された広大な平坦面には、石臼、手水鉢等の石製品の加工途中のもの、欠損品が夥

箱作畑村洪水ニ付土地邑替諸願書之控		亥七月		御普諸方		山中善太夫手控	
乍憚以書附奉願上候							
一 当月十三日大洪水ニ付畑村之儀者 山崩込潰家半潰家并ニ							
死人等茂 数人御座候ニ付右崩山之辺ヲ 見廻リ 候処崩山之							
手続大ニ 口明候所も数々御座候得者 聊之雨ニも又候崩出							
候か様ニも存女童ニ 至迄鹿覚ニ茂 是ヲ 鶯罷居候故箱作村							
東方江 罷出借宅ヲ 致候可成とも命を繋畑村御田地永続致							
度奉存候間何卒ノ御聞濟被為成下御取斗ひ被下候ハ、							
難有奉存候以上							
嘉永四年		畑村百姓					
亥七月		助治郎		市左衛門			
		忠兵衛		半次郎			
		利兵衛		長次郎			
		半兵衛					
右之通村方江 願出候故私シ共友々御願上奉候		組頭		市兵衛			
		年寄		弥助			
		庄屋仮役		藤治郎			
山中勝太夫様							
川邑欣太夫様							



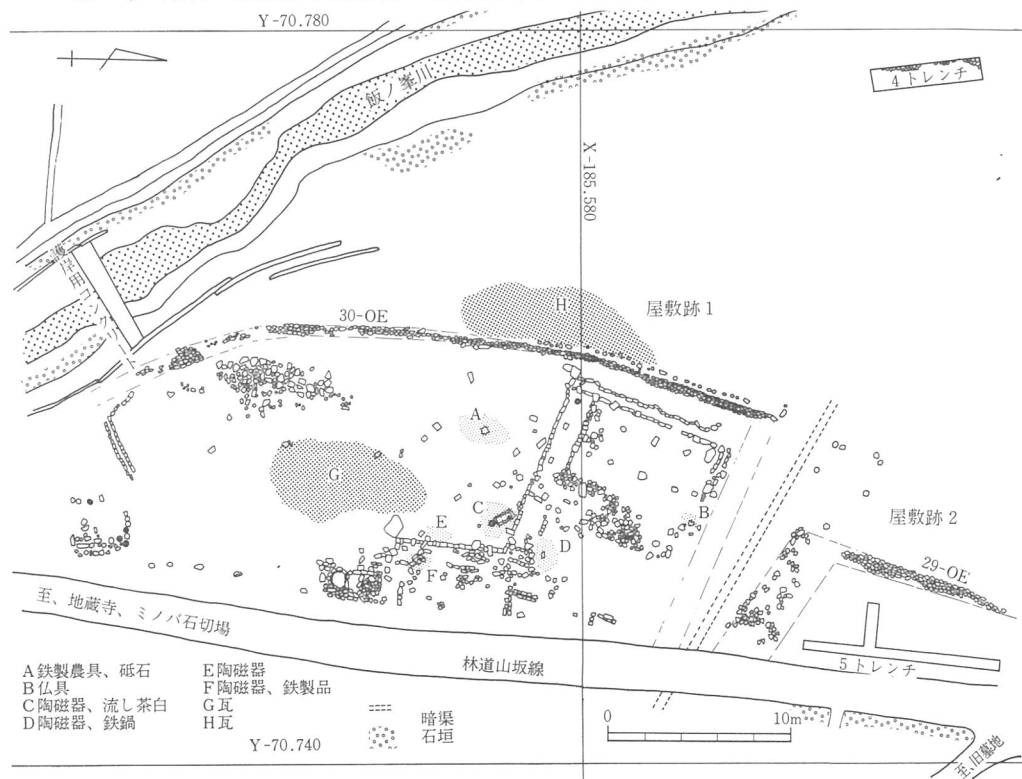
第57図 飯ノ峯畑遺跡遺構配置図

しい量で散布し、細部加工を施す際に生ずるコップや廃材が大量にみられる（15-O X）。各々の平坦面から石切り場に続く道が数本つながっており、石製品の加工場である『山小屋』的性格が考えられよう。この道を強化する為に石垣をはりつけているが、石仏、墓石、石臼、手水鉢の未製品、種々の石造物を転用している。又、2基の炭焼き窯も確認した（16-O K、17-O K）。屋敷跡の石垣付近には井戸も確認され、手工業的性格が推定される。

右岸は石垣等の規模は大きく、川に沿って上手から、寺跡、屋敷跡、水田と思われる区画と石垣をもつ。寺跡と考えられる石垣は高さ3mにも及ぶもので、方形の排水施設が数ヶ所川にむかって設けられている。広大な面積は、整然と区画されている。屋敷跡は、埋土により、裾の石垣しか確認できないが、堅固である。畦で区画された耕作地は、外側を石垣で補強してあり、水路状の溝もめぐっている。飯ノ峯川の両岸は、護岸用として石垣が確認される。右岸は比較的水利にも恵まれており、スガマ地区の結果もあわせると農業的性格が考えられよう。

以下、右岸について概略を報告する。

飯ノ峯川右岸の調査は、屋敷跡3軒分と畑地によって構成されている。



第58図 屋敷跡平面図

屋敷跡の石垣（28—O E、29—O E、30—O E、36—O E）は、現在の町道により大半を破壊されているが、屋敷跡1の石垣30—O Eは比較的良好な遺存状態を示す（第58図）。残存部分推定 $\frac{2}{3}$ で東西13m、南北40mを測る。面積約173坪（推定200坪）である。屋敷を区画する石垣は、工事により西側部分は崩壊したが、南側は高さ2m、長さ36m根石、角石、栗石によってやや裾広がりになり積みあげられている。石は各々丁寧な加工が施されており、石臼、手水鉢、一石五輪塔等の欠損品を数多く転用している。

30—O Eは泥土により2m～0.7m程埋没した状態であった。敷地内は著しい量の屋根瓦を除去すると、L字形の配置をとる石列、礎石建物跡、石組み井戸等が検出された。屋内にあたる部分からは、日常用具としての碗、皿等の近世陶磁器、建築部材である釘、鋸、仏飯具類等が多量に検出された（図版53～58）。土間にあたる部分は焼土と鉄鍋等の鉄製品・木製品が検出された。屋外からは、土塀が倒れたと思われる粘質土が集中している箇所より、甕、植木鉢等大型の近世陶磁器、瓦が検出される。又、石燈籠の散乱する中庭状空間を有する他、「茶室」の可能性も考えられる。排水施設を伴った、石臼を礎石に用いた離れ様建物も検出した。屋内に接する部分には、農具や石臼、手水鉢、石製流し等の比較的重量のある石造物が、文献を裏づけるように一瞬にして埋没している。江戸時代の一つの屋敷のあり方を知る上で貴重な資料である。屋敷跡1は、他に比べて大きく隣接する推定地藏寺跡、旧墓地から飯ノ峯畑村の中心となる存在であったと考えられよう。他に屋敷跡2（29—O E）屋敷跡3（28—O E）等からは、敷地内より、瓦質播鉢、瓦器、土師皿等、時期を遡る遺物が出土しており、石垣も積み直しがみられる為、近世以前に現位置における集落のあり方は再検討する必要がある。

石垣（21—O E、23—O E、24—O E、25—O E）は、右岸地区の南半を耕作地として区画している。畦外側に補強する形で石垣を貼りつけ、飯ノ峯川に向け水口状の耕水施設もみられることより水田等の機能が考えられる。石垣の目地は揃えているが積み方は一列に2～3段と低く簡素である。耕地部分は、出土遺物がなく、石垣周辺より中～近世の陶磁器類の破片が出土する。

石垣（19—O E他）はやや小ぶりの自然石を用いた総石積みで河川護岸用と考えられる。使用石材に加工はみられず、両岸に沿って数km施している。左岸は比較的高く積んであるのに対し右岸の護岸用石垣は、度重なる川の蛇行に伴い数回の積み直しがあり、現在の石垣の他に4トレンチから表土より約1m下に同様石垣を検出した。

その他、石垣を用いた遺構として耕作地や墓地へ通じる道の補強用石垣（26—O E・22

一〇E・18一〇E)、屋敷跡1に隣接する地藏寺跡に相当する寺院区画地などに種々の石垣がみられる。背後にひかえる石切り場が近い為他の集落にはみられない程、石垣によって、整然と区画され種々の石造物欠損品を転用している。

以上、今回の飯ノ峯畑遺跡の調査では、集落全域の測量と部分的な発掘調査であったが多数の遺構、遺物を検出した。

集落や寺院についてはさらに文献資料との照合が必要であり、民族学的、歴史学的に持つ意義は大きいと思われる。屋敷内外の中世遺物、墓地、先の試掘調査のスガマ地区の中世畑地跡は、井山城との関連が今後の課題として残っている。又、近世ではミノバ石切り場との位置関係及び、石製品の製作過程について詳細な報告は改めて述べたい。特に石臼、手水鉢は、切り出し以後、荒加工、細部加工製品への過程の各段階が判明した。阪南町は江戸時代中期以後、瓦焼、石切りが主たる生業となり(第8・9図)、陸路泉州地方へ、海路大阪市内及び美濃紀伊方面へ製品を搬出しており、各方面に製品、技術工人が流出した。石切り場、麓の集落を1セットとして今後検討したい。(服部)

	1001～ 1,100	1101～ 1,200	1201～ 1,300	1301～ 1,400	1401～ 1,500	1501～ 1,600	1601～ 1,700	1701～ 1,800	1801～ 1,900	明治時代	
	平安時代	鎌倉時代	南北朝時代	室町時代	安土桃山時代	江戸時代	江戸時代	江戸時代	江戸時代	明治時代	
全国	寛徳の荘園整理令 延久の荘園整理令 白河止息院開始 (一〇八六) (一〇六九) (一〇四五)	鎌倉幕府開始(一一八五) 保元の乱(一一五八) 戦野参詣参行	弘安の乱(一一八二) 文永の乱(一一七四) 承久の乱(一一七四)	南北朝合戦(一二三二) 鎌倉幕府滅亡(一二三三)	応仁の乱終結(一四七七) 応仁の乱始まる(一四六七)	豊臣全国統一(一五九〇) 關ヶ原の戦(一六〇〇) 根来寺滅亡(一五八五) 小牧長久手(一五八四) 本能寺の変(一五八二)	生類憐みの令(一六八七) 織内全体飢饉(一六〇五) 島原の乱(一六三七)	享保改革(一七八七) 大和川つけ登(一七〇四)	寛政改革(一七八七) 享保改革(一七〇四)	天明改革(一八三三) 大塩平八郎の乱(一八三七)	日清戦争(一八九四) 日露戦争(一九〇四) 日米修好通商条約(一八五八) 大正改革(一九〇四)
阪南町	和泉国内の新止荘開始(一〇五〇)	日荘の記注有 領の42荘中に箱作深 禁止した實茂別荘を 源頼朝が武士の狼藉を	記される(一一八九) 和泉國神谷城に廣太神社 和泉國神谷城に廣太神社 橋重基(淡輪氏)淡輪	淡輪助重井山城(一三四七) 井山城合戦(一三三六) 分属する(一三三六) 泉南地方南北朝に	淡輪次郎左衛門尉京都 寄進される(一四〇八) 鳥取荘伊勢神宮に	淡輪次郎左衛門尉京都 寄進される(一四〇八) 鳥取荘伊勢神宮に	淡輪次郎左衛門尉京都 寄進される(一四〇八) 鳥取荘伊勢神宮に	淡輪次郎左衛門尉京都 寄進される(一四〇八) 鳥取荘伊勢神宮に	淡輪次郎左衛門尉京都 寄進される(一四〇八) 鳥取荘伊勢神宮に	淡輪次郎左衛門尉京都 寄進される(一四〇八) 鳥取荘伊勢神宮に	
井山城跡											
飯ノ峯畑遺跡											
水田・畑											
飯ノ峯神社祠											
旧墓地											
新墓地											

第3表 飯ノ峯畑村消長図

## 第4章 ま と め

府下における中世城郭の発掘調査例は、羽曳野市高屋城等数例に留り、集落、墓域土器等、中世社会の研究が進む中、城郭研究に必要な城の時期・規模、性格等は、不明瞭な部分が多い。



第59図 波太神社石燈籠



第60図 加茂神社石造鳥居



第61図 箱作共同墓地六体地藏仏

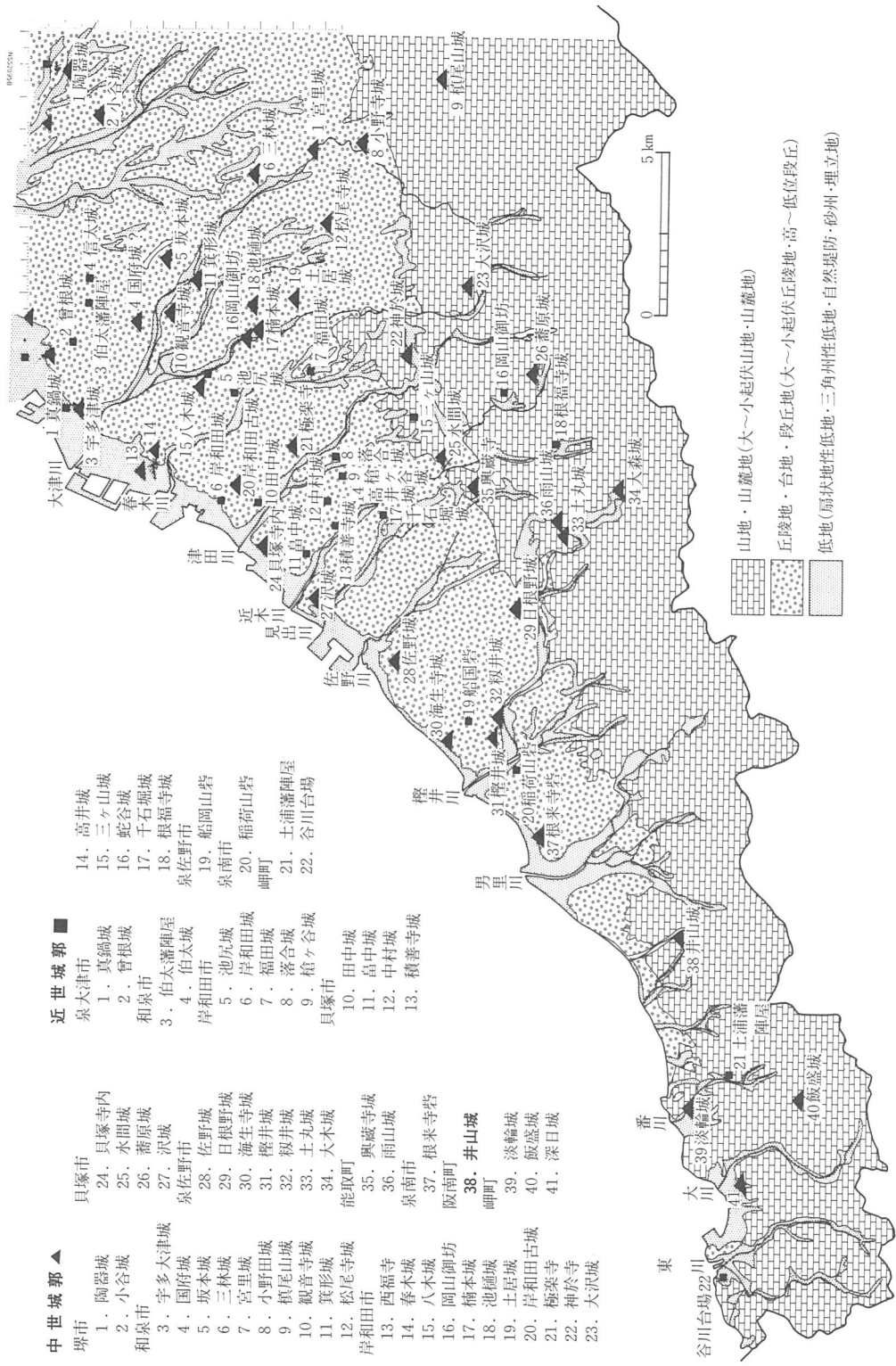
分が多い。

井山城跡は、城域と考えられる120,000㎡の全面調査を実施することにより、中世の城が機能する為の地理的占地を考える上で注目に値する。急峻な山頂上に城固有遺構である曲輪、堀切等を検出したことで動乱の泉州地方の山城として良好な資料となり得よう。特に曲輪4より出土した瀬戸碗、土師皿、瓦質播鉢から井山城は14世紀末～15世紀に位置づけられる。従来の縄張り図、測量図、絵図、文献等に、確実な時期の遺物を伴った遺構という面から別視点のアプローチが出来るものと思われる。

当初、文書の日数、曲輪の構造、立地条件等より戦時の短期的な出域的性格を有すると想定したが、井山城東麓に確認された中～近世集落の調査により、居館も含めた城域を再検討する必要にせまられ、今後の課題としたい。

中世城郭は千早赤坂城等の絵図に代表される天剣を利用した山城





**中世城郭 ▲**

- 堺市 1. 陶器城  
 2. 小谷城  
 和泉市 3. 宇多大津城  
 4. 国府城  
 5. 坂本城  
 6. 三林城  
 7. 宮里城  
 8. 小野田城  
 9. 榎尾山城  
 10. 観音寺城  
 11. 箕形城  
 12. 松尾寺城  
 岸和田市 13. 西福寺  
 14. 春木城  
 15. 八木城  
 16. 岡山御坊  
 17. 楠本城  
 18. 池樋城  
 19. 土居城  
 20. 岸和田古城  
 21. 極楽寺  
 22. 神於寺  
 23. 大沢城

**近世城郭 ■**

- 泉大津市 1. 真鍋城  
 2. 水間城  
 和泉市 3. 伯太藩陣屋  
 4. 伯太城  
 岸和田市 5. 佐野城  
 6. 池尻城  
 7. 岸和田城  
 8. 落合城  
 9. 積ヶ谷城  
 貝塚市 10. 田中城  
 11. 畠中城  
 12. 中村城  
 13. 積善寺城  
 泉南市 14. 西福寺  
 15. 春木城  
 16. 岡山御坊  
 17. 楠本城  
 18. 池樋城  
 19. 土居城  
 20. 岸和田古城  
 21. 極楽寺  
 22. 神於寺  
 23. 大沢城

**近世城郭 ■**

- 泉大津市 14. 高井城  
 15. 三ヶ山城  
 16. 梶谷城  
 17. 千石堀城  
 18. 根福寺城  
 泉野市 19. 船岡山砦  
 20. 稲荷山砦  
 泉南市 21. 土浦藩陣屋  
 22. 谷川台場  
 岬町 23. 高井城  
 24. 三ヶ山城  
 25. 梶谷城  
 26. 千石堀城  
 27. 根福寺城  
 28. 船岡山砦  
 29. 稲荷山砦  
 30. 土浦藩陣屋  
 31. 谷川台場  
 32. 高井城  
 33. 三ヶ山城  
 34. 梶谷城  
 35. 千石堀城  
 36. 根福寺城  
 37. 船岡山砦  
 38. 稲荷山砦  
 39. 土浦藩陣屋  
 40. 谷川台場

山地・山麓地(大～小起伏山地・山麓地)  
 丘陵地・台地・段丘地(大～小起伏丘陵地・高～低位段丘)  
 低地(扇状地性低地・三角州性低地・自然堤防・砂州・埋立地)

第62図 泉州地方の地形による中近世城郭分布

が多いと考えられており、領主にとり地理的條件の要ともなり、かつ攻撃、守備共に兼ねた戦闘中心の機能と思われる。一国一城令以降、近世城郡は、大阪城、岸和田城を代表とする。経済性を重要視した都市計画に組み込まれた立地条件の中で構築され、堅固な天守閣をもつ長期居館の機能をもつ平地形の城である。社会背景を含めた広義的解釈の中で城域全体の発掘調査によって得られる基礎資料の蓄積が城郭研究に必要とされており、今後とも、城域全体の調査が望ましいと考えられる。

飯ノ峯畑遺跡は、屋敷跡、神社、寺院跡、墓地、水田跡等、中～近世の一つのまとまりをもつ集落の全容説明が期待できる遺跡である。隣接するミノバ石切場との関係も密接であり、江戸時代中期以降箱作村の主要産業の一つとなり得た和泉砂岩製の小型石製品の製作過程、種類、搬出経路を明らかにすることが可能であり、今後、泉州地方の石切場跡の変遷、石工集団の問題を考える上で、重要な遺物を多数出土している。又、集落内の近世陶磁器については、近隣の貝掛村、金剛寺遺跡の発掘調査資料との比較検討後、絵図・古文書との検討も加えた上で改めて報告したい。

# 参考文献

## 第1章 調査の経過

- (1) 『日本城郭大系』 第12巻 1981
- (2) 『阪南町内埋蔵文化財一分布調査報告書一』 (財)大阪府埋蔵文化財協会  
第3輯 1985
- (3) 『阪南丘陵埋蔵文化財一試掘調査報告書一』 同協会第9輯 1987

## 第2章 立地と環境

### 第1節 地理的環境

- (1) 『阪南町史』 上下巻 1977、1983
- (2) 『和歌山県史』 1983
- (3) 『南大阪湾岸整備事業の環境影響について』 大阪府企業局 1984
- (4) 地域地質研究報告『岸和田地域の地質』 地質調査所 1986

### 第2節 歴史的環境

- (1) 『大阪府文化財分布図』 大阪府教育委員会 1986
- (2) 『阪南町史料目録』 第1集～第3集、1973、1975、1976
- (3) 『大阪府史』 第3・第4巻 1979、1981
- (4) 『高石市史』 第I巻 1986
- (5) 『和泉名所図絵』 1976
- (6) 『摂津名所図絵』 1976

## 第3章 調査結果

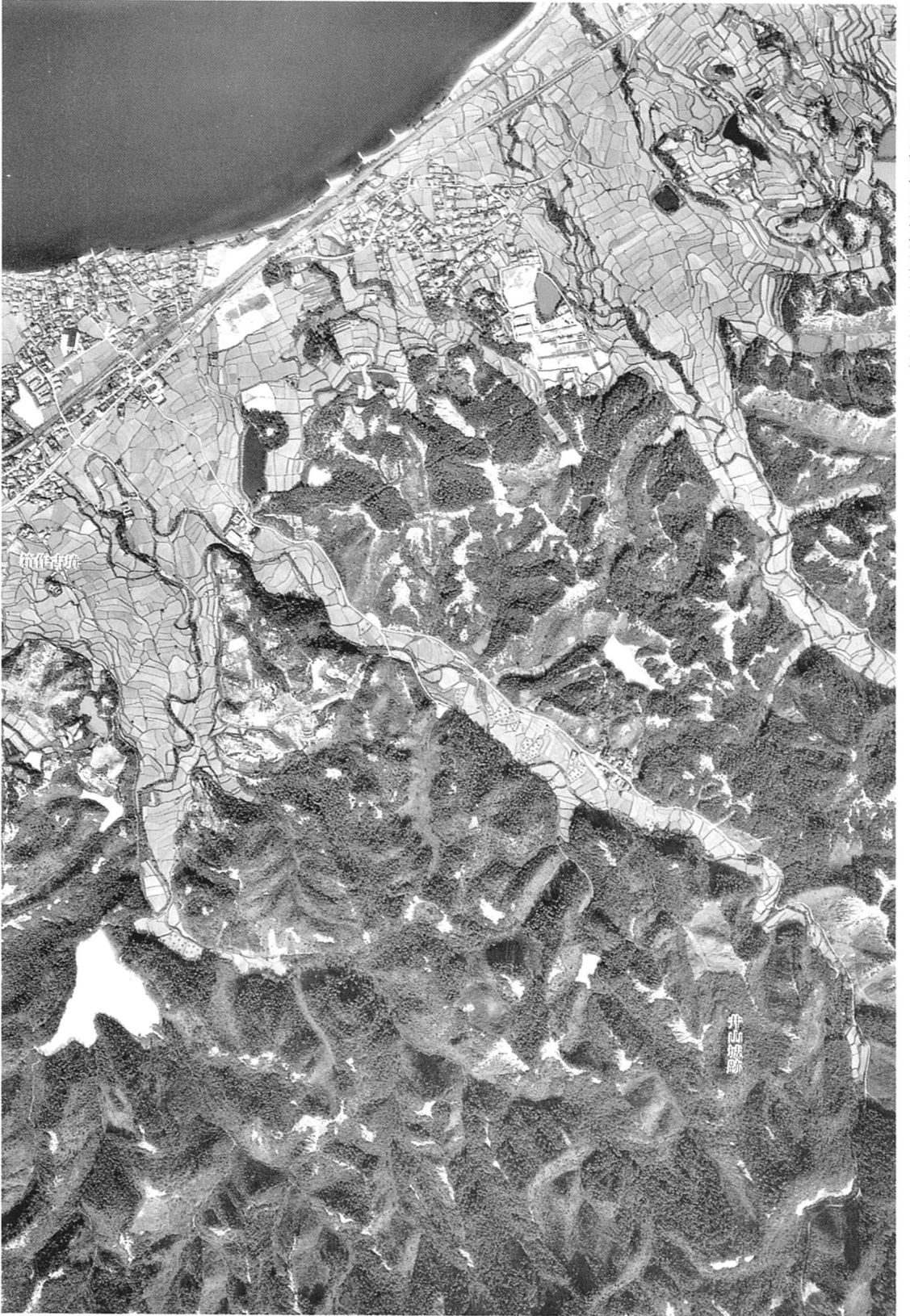
### 第1節 調査結果の概要

#### B. 井山城跡試掘調査結果

- (1) 大越勝秋 『泉南郡地名集』
- (2) 『阪南町地籍図』 大阪府企業局閲覧資料
- (3) 『大阪府史蹟名勝天然記念物』 第4集 大阪府教育委員会 1929
- (4) 『日本地名大辞典』 第27巻一大阪一1983

# 版 圖







図版四 井山城跡周辺航空写真(四)







a . 伐開前現況 (A地区から)



b . 伐開前現況 (D地区から)



a. 伐開後現況 B地区曲輪1



b. 伐開後現況 C.D地区頂部3.曲輪4



a. 伐開後現況 D地区道状遺構



b. 伐開後現況 D地区道状遺構



a. 調査区全景 (西上空から)



b. 調査区全景 (北上空から)



a. 第2～6トレンチ



b. 第9トレンチ



a. 第9トレンチ 礎石検出状況



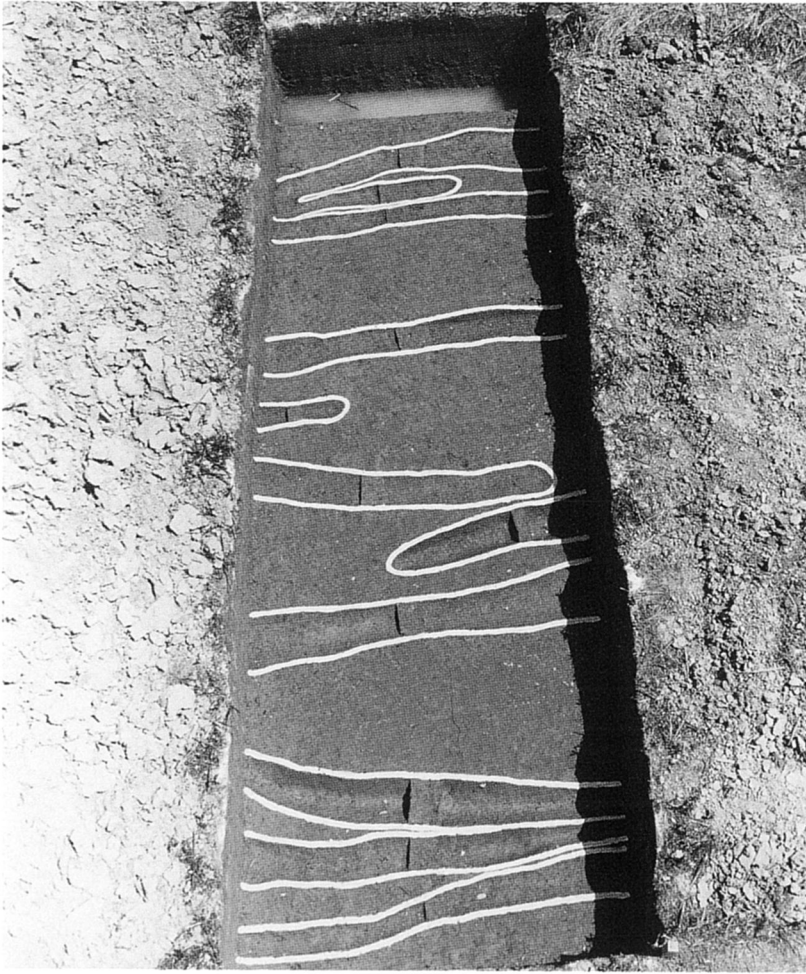
b. 第11トレンチ 堀切検出状況



a. 調査区全景



b. 調査区全景 左スガマ地区, 右の場地区



a. スガマ地区  
第19トレンチ  
小溝群検出状況

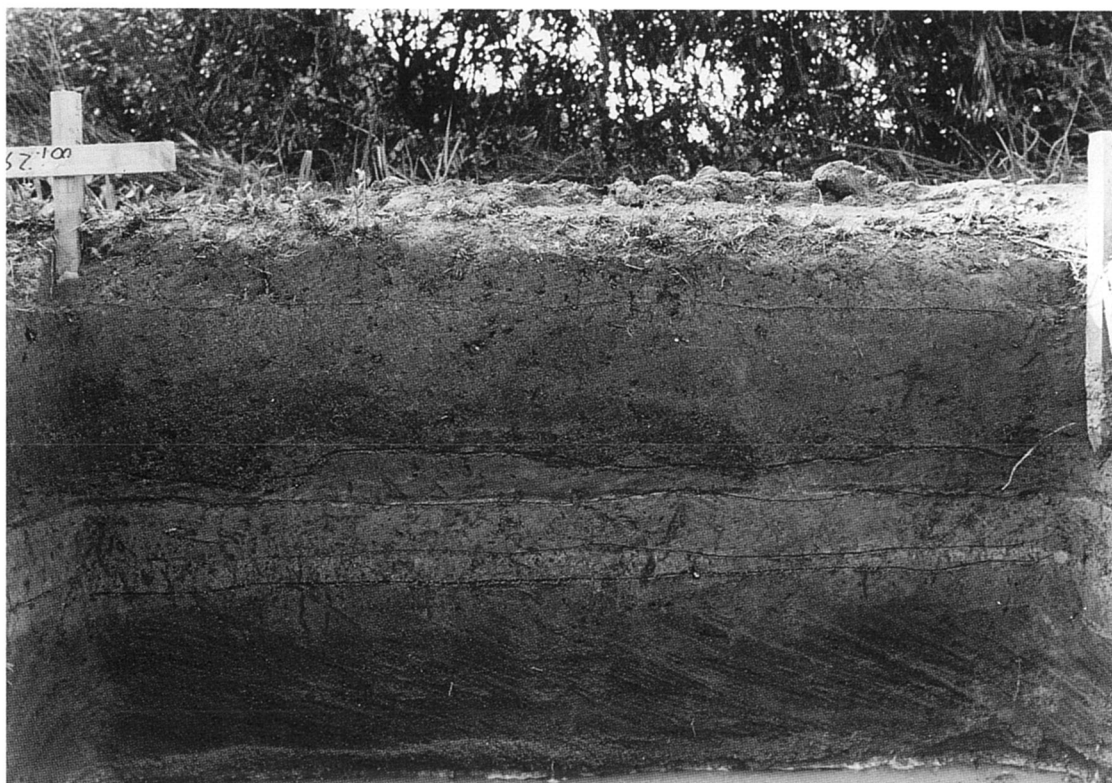


b. スガマ地区 第14トレンチ断面





a. スガマ地区 第22トレンチ足跡検出状況



b. スガマ地区 第24トレンチ断面



a. 的場地区 第29トレンチ小溝群検出状況



b. 的場地区 第29トレンチ断面



a. 的場地区 第26トレンチ断面



b. 的場地区 第30トレンチ断面



a. A地区 丘陵先端部(東から)



b. B地区 頂部1(南から)



a. C地区 頂部2 (北から)



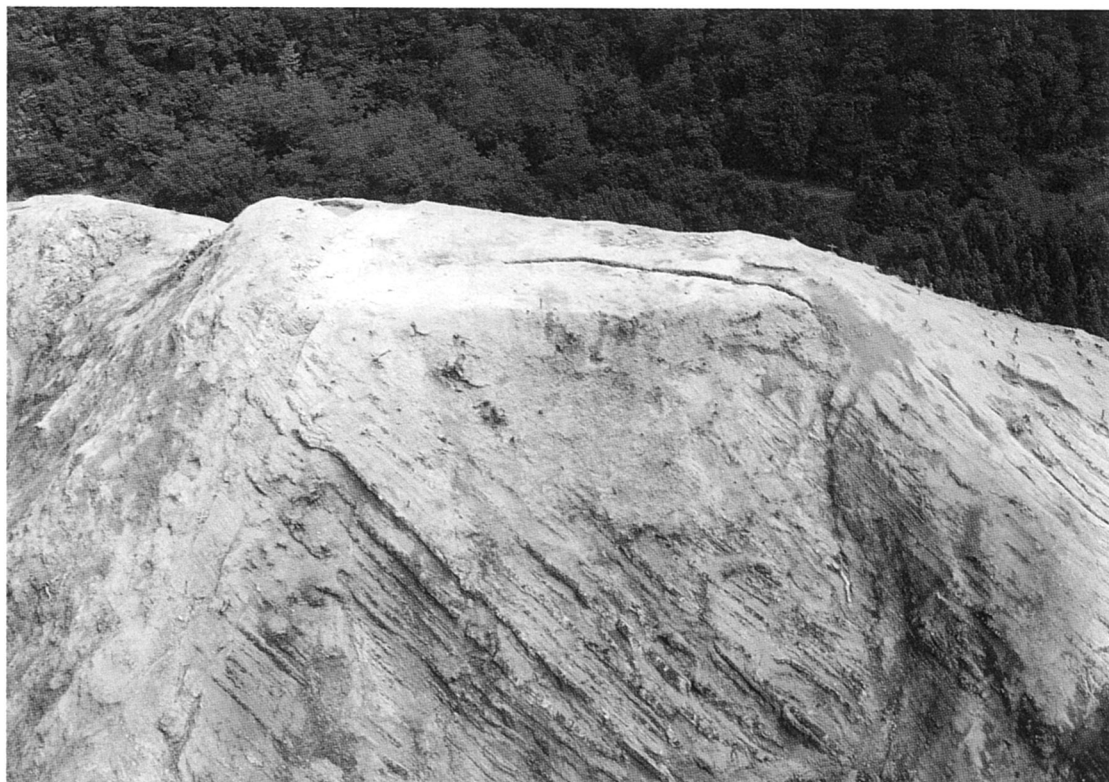
b. D地区 曲輪4.5 (北から)



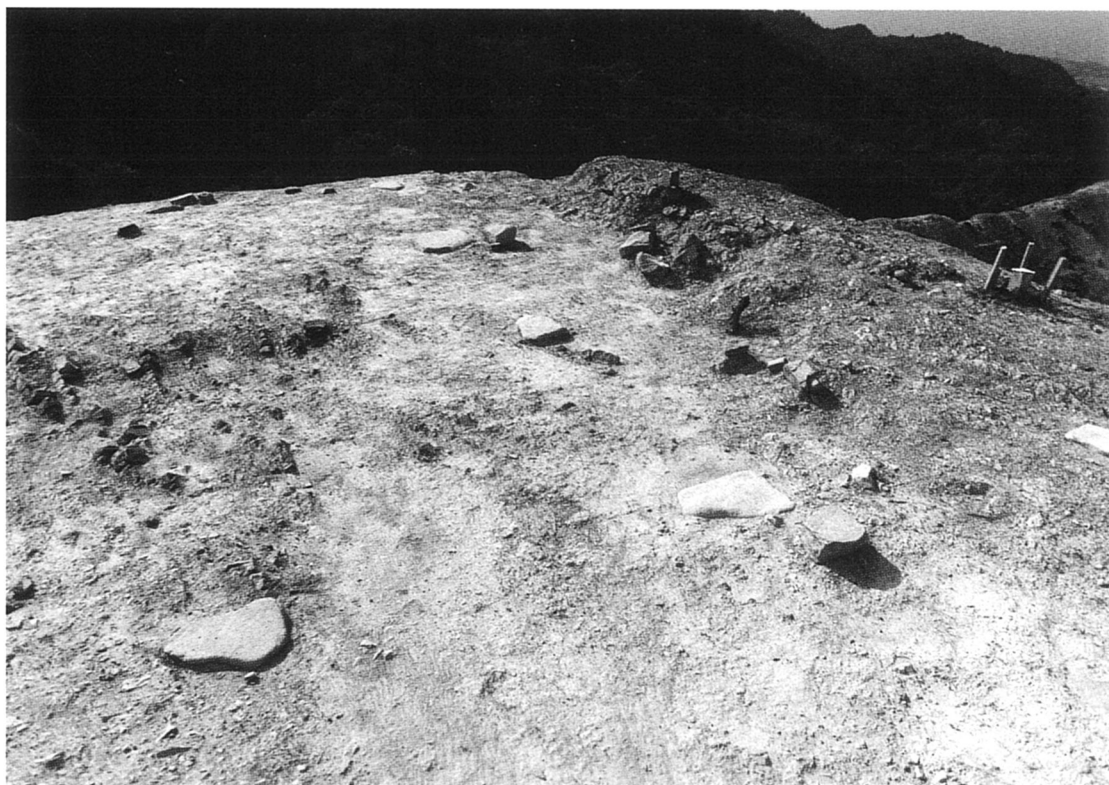
a. B地区 曲輪1 215-O X (東から)



b. B地区 曲輪2 227-O X (東から)



a. D地区 曲輪4 255-O X (西から)



b. D地区 礎石建物1 250-O B (東から)



a. D地区 曲輪4 石組み2 253-O X (北から)



b. D地区 曲輪4 石組み1 252-O X (西から)